

研究所だより

第297号
2010年7月13日
発行：土佐清水市教育研究所
TEL 82-3015

【ほめちから】—松本徳重 著

1, 忙しくてゆっくり子どもと話している時間がないんですが。
忙しいときは、どうしても「自分だけが忙しい」と思い込み、子どものことを「ほめる」心の余裕がないことが多く、子どものちょっとした行為・行動にイライラしてしまい、すぐに怒りをあらわにしてしまいがちです。逆に、ゆったりとした気分の時に、落ち着いて子どもの行為・行動をじっくりと観察すると「ほめる」材料も見つかりますし、教師の顔もゆるみニコニコと子どもに接することができます。とは言うものの、教師は評価の時期や研究授業が迫ってくるなど、ものすごく忙しい。それに没頭する。でも、子どもにとっては、**通知表の時期であろうが研究授業が迫ろうが、担任の先生が、公務分掌で重責を担おうが、そんなことは関係がないのです。**

ここはひとつ腹をくくって、自分の都合はさて置いて、目の前の子どもを**第一に考えて接することができる**ようになれば、徐々に心に余裕が出てくることでしょう。

2, 忙しいときの仕事の工夫はありますか。

①. 仕事を具体的に把握する

忙しいときには、メモを教卓に貼っておき、それを見て重要度から仕事をこなしていくのす。具体的に何をしたらよいのか「忙しさ」の正体を把握して、心の中で見通しが立てば、冷静になれるのです。

そして子どもと一緒に授業をしたり、学級活動しているときは、他の仕事を考えないで子どもと関わることに没頭すると、意外に子どものことが見えてきます。

②. 発想を変えてみる

心の持ちようですが「も」と考えるか「しか」と考えるかでゆとり雲泥の差が出ます。つまり「あと3日しかない」と捉えるのかそれとも「あと3日もある」と捉えるかで、心のゆとりが異なります。

「しか」は、脅迫感で自分を追い詰めます。「も」と、捉えると「まあ、なんとかなるかな」とゆとりが生まれます。

3, それはそれ、これはこれ。

あまりの忙しさに、子ども達が私の所に来ても話を聞いてあげることができず、忙しさを自分流に合理化して子どもに目をかけないでいたときのこと、「先生は、忙しいの?」「うん、とつても」「そう。でも先生ね。先生は私たちの担任だよ。・・・」その言葉を聞いたとたん、頭をバットで殴られた感じがしました。教師の忙しさは、子どもにとっては関係のないことなんです。

子どもはどんなときでも「担任」として、接して欲しいと訴えていることを感じ、私は仕事の仕方を変えました。

「子どもといるときは、子どもと一緒にいよう」「子どもがいなくなったら、仕事に埋没しよう」

「教師の本務って何?」と考え「腹をくくる」ことにしました。そうしたら、意外と子ども達と向き合っているいろんなことができ、「ほめる」こともできるようになっていきました。



<「人」として成長できる野球部>—高知中央高等学校長 楠井克治 春夏6回甲子園に導いた名監督の熱い思いと指導

監督人生33年の楠井校長は高校野球を通じ、生徒達の間人づくりを目指している。練習中は、チームや仲間のことを考えてプレーしているか、生徒一人ひとりの動きを注意深く見守る。自分がチームのどの部分を支え、どうすべきかを判断できる人間になること。それは社会に巣立ったとき、「生きる力」になると信じている。

視野を広げるため、部員達は、生徒会や校内・地域のゴミ拾いなど、様々なことに参加。強制ではなく、自主的に取り組んでいるのだとか。生徒会で度胸をつけ、ゴミ拾いで地域の大人達と接する。目指すところは、野球と同じ、「人」としての成長だ。

大切なのは結果ではなく、一生懸命目標に向かう姿勢を見てあげること。その過程をしっかりとれば、人間力ある生徒に育つ、と楠井校長は語る。「野球部での経験は、様々な世界で生きる。社会人としてのレギュラーを目指せ!」名監督の熱い指導は続く。

Profile—1955年和歌山生まれ。早稲田大学4年次より國學院大學久我山高校の野球部監督に就任。甲子園出場3回、第15回明治神宮大会優勝を果たす。その後、江の川高校を3回甲子園に導くなど4校を経て、2008年に高知中央高等学校へ。現・中央高等学校長兼野球部監督

清水高校の野球部員の皆さんも同じ精神で部活動に挑んでいることと思います。出勤途中で見かける早朝よりのランニングの姿、地域のゴミ拾いへの取り組み。こうした取り組みのなかで「生きる力」を培い「社会人」としてのレギュラーを目指していることと思います。もうすぐ甲子園を目指しての県予選が行われます。培ってきた力を存分に発揮して欲しいものです。

<以南人物伝・池 道之助(1)>—広報とさしみず より

「大地震の前には急に井戸の水は減る物なり、減らぬ井戸は水は濁る物なり」
「潮の狂うとき井戸の水濁れば必ず大地震の下地なり」「大地震の時、火を消し家を出ること第一なり」池道之助は、32歳の時安政の大地震を記録し、後世に残しました。

彼は文政4年(1821年)中ノ浜、池左平の長男として生まれました。家は薬などを売る商家だったそうです。幼少より勉学で向学心が強く、漢学や歴史、易学、天文学を学び、さらに兵法、柔術・剣術を習得していきました。

34歳の時、土佐藩雇足軽となりましたが6年後に目を患って、中ノ浜に帰り若者に学問や剣術を教えて日々を過ごしていたとき、薩摩での一仕事を終えた万次郎が帰郷し、道之助の家に寄宿しました。慶応2年(1866年)1月のことです。

すると間もなく、土佐藩から万次郎に、新設した開成館に出仕するように呼び出しがありました。道之助は万次郎から仕事を手伝うように勧められ、意を決して同行することにしました。道之助45歳、万次郎39歳でした。

この時、土佐藩の貿易や軍艦・武器等購入のため、藩の重役、後藤象二郎が長崎に行くことになり、万次郎は当然同行することになりましたが、道之助も万次郎の推挙により、測量学の修行とという名目で、随行を許されたのです。

一行は7月7日高知を出発、宇和島、臼杵を経て、同月25日長崎に到着しました。当時の長崎はオランダ、イギリス、プロシア等、列強の商館があり、貿易が盛んに行われていました。ここで道之助は見聞を広めていくのです。そして、10月には軍艦購入のため後藤象二郎に従い万次郎と共に、上海にまで行くことになったのです。12月、仕事を終えた万次郎は長崎から江戸に帰りましたが、道之助は土佐商會係を命ぜられ、長崎に残って坂本龍馬や岩崎弥太郎と共に活躍することになります。(次号へ続)